
女子寮GirlMeetsBoy

矢藤勝海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子寮G i r l M e e t s B o y

【Nコード】

N 9 6 2 9 F

【作者名】

矢藤勝海

【あらすじ】

「来栖、キミ…男だったのね…」「なんでクローゼットから登場するんですか、砂川さんっ！」春日辺女子高等学校付属寮で同室のマイペース少女＋女装型美少年。甘口友情物語。

前からほっそい腰だなあとは思ってたけど、胸があんなにえぐれてるとは。

せつないよね。

胸のある子は走るとき邪魔、うつぶせになるとつぶれて苦しい、かわいいブラ探すのに一苦労というけれど、なかったらなかったで心寂しいものじゃない。わかるわかる。ぎりぎり滑り込みBですから。

そっか。この断崖絶壁を隠すために、病弱美少女は体育も不参加で、昔大怪我したから他人に着替えを見られたくないなんて噂まで流して、今もこそそ一人で着替えてるんだね。

……………なんていうと思ったか。

同室で一年近く過ごしてるのに、今まで気づかなかったなんて、我ながら鈍すぎる。

自分と彼女に同じくらい苦いものを感じながら、頭を抱えて扉を開けた。

「来栖^{くるす}…キミ、男だったのね…」

「うわっ！なんで当然のようにクローゼットの中から出てくるんですか、砂川^{すなかわ}さんっ！めちゃくちゃ怖いんですけどっ！」

うん、確かに怖いよね。クローゼットから出てくる女。なんのホラーだろう。自分でもひくわ。

「それがさー、聞いてよ！ポーカーの負けがこんじゃってさー、狭山のやつ、『罰ゲームだからあ、美少女のビクリした顔写メってきてえ。スナコ同室じゃーん』…とかいうのよ！しゃーないから隠れて驚かすことにしたんだけど、ホント面倒くさいことやらせん

なつて思わない？」

「……そうですね」

「あ」

いつもの調子で同意を求めてしまったことに気づいて、こほんと咳払いする。

「まあ 結果的には私の方がびつくりしたワケだけど。男よね、来栖 明君？」

じつと彼の胸を見ると、来栖は恥らう乙女のように両手で胸を隠した。

ちよつと。そんなことされたら私が変質者みたいじゃない。

「……ち、違うんです、すぐ貧乳なんです、恥ずかしいので特殊パッド十六枚で隠してるんです！」

「アホか！いくら貧乳たって、そんな赤貧な胸があつてたまるかつ！」

「いいえっ！本当に貧しいんです！赤札だらけで夜逃げ寸前の胸なんですっ……！」

「……………」

アホだ。

顔が美少女だから気づかなかつたけど、来栖は本物のアホだ。

私はクローゼットから飛び出した。

「あ。なんだかドラえもんみたいですな、砂川さん」

「うるさいよ、のび太っ！」

来栖といつものほのぼのボケツッコミをすると、なんかせつないでも、真実は白日の下にさらされるものなのだ。

「そこまでいうなら覚悟はあるんでしょうね」

「覚悟？」

何も分かっていない来栖は、小動物系の顔をちょこんと傾けた。本当に大貧民な胸なだけだったらどうしようと思いたくなる可愛さである。

しかし、手を抜く気はない。来栖と部屋の扉の間に立つと、さっ

と腕を組んで厳しい表情を作った。

「キミが本当に男じゃないなら、証明してよ」

「砂川さん…？」

「スカート脱いで、今、ここで」

「そんな…！生まれたままの私が見たいなんて、砂川さんの変」

「違うわ、ボケツツ！！スカート脱げていっただけじゃ！下は脱ぐなッ！！」

鋭くつつこんで、話をそらそうとした来栖を遮る。

来栖は途方に暮れた様子だったけど、最後にはがくつと肩を落とした。

「最悪だ…」

うなだれた半裸の少女、もとい、少年だったわけだが 彼を見下し、わざとらしく笑う。

「最悪ね。いつてくれるじゃん。私じゃなかったら今頃晒し者にされてたかもよ？」

「ごめんなさい、別に砂川さんだからって意味じゃなくて」

「うん。わかってたけどいつてみた」

「……前から思ってたけど、砂川さんていい性格してますよね」
「よくいわれる。なんでだろ、お淑やかで良心的な乙女の模範じゃんねえ？」

にっこり笑っていうと、来栖は首の限界まで目を逸らした。

どういう意味かな、それ。

「なんで目を逸らすの、く・る・す・く・ん？」

「待って、砂川さん、静かにしてください！こんなとこ誰かに見られたら！」

「確実にこいつらできてるなって思われるね。私が来栖を襲ってるようにしか見えないし」

「砂川さんっ！」

春日辺女子高等学校付属であるうちの寮は、その手の冗談が素面で噂話にされる恐ろしい世界だ。来栖の顔は完全にひきつっている。

「もつとも、キミのウルトラAマイナスカップが目に入らなかったらの話だけど。露出狂じゃないんだし、さっさと偽乳つけて服着ちやえば？」

さらりと指摘すると、来栖は顔を赤らめながら、内側に仕込みのあるブラとキヤミをつけて学校指定のブラウスをはおった。

見てると、ボタンを留める手がぎこちないのなんの。

「とろいなー。もっとちやっちやっとな着替えらんないの？」

「……誰のせいですか」

「あら。今すぐ談話室に走って、大人しい美少女として有名な来栖嬢の正体ぶちまけて欲しい？」

ちよっぴりいじめっ子気分である。

扉に背中を預けて、にまにまと来栖の反応を待つ。

「……………それもいいかもしれない」

「え？」

予想外の返答に目を瞬かせると、来栖は鬱陶しげにリボンをタイをしめて溜息をついた。

「ブラジャーは窮屈だし、スカートは足が寒いし、いちいちスネ毛処理しなきゃ駄目だし、パンツは心もとないし、女子の制服っていいことひとつもないですよ」

健全な男ならそうだろう。

見て可愛いのはともかく、自分で着てもねえ。

「わっかんないなあ。女装趣味じゃないなら、来栖、どうして女子高来たの？試験もきちんと受けて、体育は総パス、身体計測関係は全部指定病院行き。他にも色々大変じゃん。なのに必死で誤魔化してる。なんで？」

「それは……個人的な理由だから話したくありません」

「ふうーん」

往生際悪く逃げた来栖を冷ややかに見据える。

「オツケー、言い方を変える。来栖、何も話さないなら私はキミのことを他のやつらにつきだすしかない。いっとくけど、晒し者って

のは脅しでいったんじゃないよ。来栖もここで一年オンナやってればわかるっしょ、女を集団で敵に回すとどうなるか。ここの女子寮生にとっちゃ、キミはカンペキ不審人物だし、きつと拾う骨も残らないね」

「砂川さん……」

来栖は傷ついた顔をした。

おいおい、そんなに女生徒として換算して欲しかったのか？………
…なわけないか。

分かってる。私に拒絶されて、裏切られた気分なんですよ、来栖。そんなの、私だって同じだよ。

来栖と私は、この一年足らず、ひとつの部屋で全てを分かち合った。すごく仲のいいルームメイトだった。

「……友達だったじゃん、うちら。性別偽っただけの話じゃないってわかってんの？私、騙されてたんだよ、よりによって、一番仲の良かった来栖に」
ともだち

卑屈に笑って口にした言葉に、来栖はほっとした顔を見ると
思いつきりタツクル、じゃなくて、私に抱きついてきた。

「ごめんなさい、砂川さん、ごめんなさい！」

「……………」

ホントだよ。

お上品なサイズの胸が嘘なら、いっしょにいった美容院で女の子らしいってほめた髪も嘘、コスメ売り場で私がファンデつけた時はにかなだ顔も嘘で、カラオケでちよつと低めなのが恥ずかしいっていった声も、みーんな嘘だよ。……それってあんまりじゃないの。黙っている私を、来栖はほっそい体全部使って、ぎゅうつと抱きしめた。

知ってる香りと長い髪。子どもみたいに高い体温、泣き出しそうに震える、来栖の声。

「ごめんなさい…嘘だらけの友達で、本当に、ごめんなさい……」
わたし

……そうだね、自分でも意外なほど傷ついたよ。それでも、私に

しがみついているこの来栖は「本当」だったらって、まだ思ってる。だって、ズルイんだ。来栖の嘘つきな髪から、二人で馬鹿話しながら二時間かけて選んだシャンプーの香りがしてくんの。来栖と過ごした時間、全部が嘘だったわけじゃないって、本当だったものも同じくらいいっぱいあるって、私に訴えてる。

信じてみようか。私を抱きしめてる友達は、「本当」だって。

「来栖の事情、話してよ」

「…でも」

「友達なら、面倒抱えてないでちゃちゃっと相談しろってえの。アホ」

「ん。……ありがとう、砂川さん」

「ハイハイ。つかさ、キミ、やっぱり下あるじゃん」

「すすす砂川さん！ツードコ触ってんのーッ！！」

大慌てで飛びのいた来栖に、やらしく笑ってみせる。

「えー。いつて欲しいの？」

「いい！いわなくていいっ！！」

来栖は一人で騒いでどっと疲れたようだ。小動物系のキラキラ目がえらく恨みがましい。

思いついて飲みかけだったスポーツドリンクを投げてやると、嬉しそうに笑って飲み始めた。単純なやつめ。

それにしても……いくら見た目が私より美少女でも、上がなくて下がついているとなると、今まで間違いが起ころなかったことが不思議。ほとんどハーレム状態じゃん？平気なもん？

しかし、ここでも来栖は私の想像の上をいった。

「砂川さん 同性愛って、そんなにまずいものかな」

「ハイ？」

どーせいあい？何？

「オレ、親に病氣つていわれたんだよね。でも、あの人も十分病氣。『いくらおまえがおかしくても、女子高になら一人くらい好みの女がいるだろう』ってさ。時代劇の大奥じゃないんだから…バカだろ?」

すみません、私もさつきハーレムとか思っていました。バカです。というか、さすがに気づいた。間違いなんか起こらないはずだ。

「来栖は男が好きなんだ?」

「ん。中学の時、好きになった相手が男子校の友達だったから。卒業前にどうしても告白したかったんだけど、母親に書きかけのラブレター読まれちゃって」

「ラブレタあ? 来栖、キミ、何時代の人間? 携帯電話もってなかったの?」

「……人が真面目に打ち明け話してる時にツッコミありがとう。オレの学校じゃメールより主流だったんですうー」

あ、ふくれた。リスだ、リス。

「そうなんだ。まあ、メアド手に入れるのもけっこう面倒だし、恋文なんて乙女チック、じゃない、硬派な所だね、来栖のガツコ」

「砂川さん、下手なフォローはいらないから」

「あはは…ゴメン、話続けちゃって」

例の美少女顔で睨むと、来栖は首を振った。

「それだけだよ。母親がパニック起こして、家族にカミングアウトした途端ホテルに軟禁、後は親父にここに押し込められて今に至ります 来栖^{オレ}明の物語は、それでお終い」

少しおどけた調子でしめくると、来栖は疲れたように座り込んだ。

いつもしている女の子ずわりじゃなくて、スカートで胡坐モードでも、開き直ったって顔じゃない。色んなことに疲れて、もう全部どうでもいい、そんな顔してる。

「来栖はどうしたいの?」

「さあ? どうしたいのかな、自分でもわからない」

「ここから出たら、どうなんの？」

「……決まってるよ、また違う何かに押し込められる」

来栖は笑った。

仕方ないって顔で笑った。

すごく、ムカついた。

「いればいいじゃん」

「え？」

「え、じゃない。ここにいればっていったの」

「だって、……いいの、オレ」

「いーんじゃないのー。誰も来栖の女装に気づいてないし、誰かに迷惑かけてないし？」

「でも、砂川さんには迷惑かけるかもしれない」

「へえ？じゃあ、今までは私に迷惑かけてなかったって？」

「そうじゃない！でも、もっと面倒なこととかあるかもしれない、そうになったら、今のオレはきっと砂川さんを頼りにしちゃうし」

「だーかーらー。そういう面倒事を友達に相談しろって、さっきからいってんですけどー。二度も言わせるなっつての」

「でも…あの、」

「なに？」

来栖はいいかけた言葉をぐっと飲み込んで、恐る恐る、私に手を差し出した。

「砂川 元子^{もとこ}さん、本当の来栖^{オレ}明と友達になつてくれませんか？」

聞いたことないメチャクチャ真面目な友達^{フロボーズ}申し込み。

びっくりしたけど、すぐに笑ってその手をとった。思ってたよりでっかった手を、私の両手でぎゅっと握りしめてやる。

「当然っしょ。来栖みたいな面白い友達、私が逃がすわけないじゃ

ん」

「ん。すごく嬉しい」

おお。素直だな、来栖。外見が美少女とはいえ、さすがにちょっと照れる。

でも、私の隣にいる時は、そうやって幸せそうに笑えばいいんだ。仕方ないとか、どうでもいいなんて顔は、しなくていい。

そんでき。

いつかココを出て、私が隣にいらなくなっても、ちゃんと今みたいに笑えるキミになって欲しいって心から思ってるよ、来栖。

でも、それはそれとしてね。

「来栖ー、友達更新記念に写メとらしてよ」

「更新記念…砂川さんらしいよね。いいけど」

「じゃあ、携帯のほう見ててね。さん、に」

いち、という代わりに、私は来栖の頬にキスをした。

「！！」

カシャッ！

「……す…砂川さん、今のって…」

「ごめんねー。一応、罰ゲームだからさ、やっとなないとうるさいのよ」

「……………」

よしよし、うまいこと来栖だけとれてる。

男が好きな来栖には大したことないだろうと思ってたけど、インパクトは十分だったみたい。めっちゃびっくりした顔で固まってる。

「砂川さんて」

「うん？」

「実はけっこう考えなしだよね…」

「あー、そうかも。これからポーカ―はほどほどにするわ。またこ
んなのくらったらたまないし」

「……ポーカ―のことじゃないんだけど」

「なに」

「なんでもないです…」

なんだ、その疲れきった溜息は。

来栖を不審な顔で見つめると、苦笑いして「本当になんでもない
といった。何なんだ。」

「なんでもないなら狭山んトコいつてくるよ、罰ゲーム終了つて。
ついでに自販機で買うもんある？」

小銭用の巾着をひっぱりだして聞く。

「別にないけど」

はいはい。その割には、何か言いたそうな顔してますよー。

「くるーすー。『けど』の続きはー？」

しゃーないのでつついちゃると、来栖は照れたようにはにかんだ。

「ん。……いつてらっしゃい、元子さん」

うぐっ。

そ、そうきたか…恥ずかしいやつめ。

「……いつてきマス、明」

「ごによごによ口にして、逃げるように廊下へ出る。いい加減、私
もつきあいがいいつつーか、甘いつつーか。」

まあ、あれもこれも、少しずつ慣れるでしょ。

ゆっくりたくさん楽しめばいい。来栖と私の時間は、まだまだい
っぱいあるんだから。

ちなみに。

この玄関先の挨拶が恒例になったせいで、二年目には公認バカッブル扱いされるはめになり、流されるまま、三年目には「校内No.1お姉様ズ」として不動の地位を築きあげ、卒業するまで周囲の誤解は解けないままだったりする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9629f/>

女子寮GirlMeetsBoy

2010年10月8日15時21分発行